

石巻・大川小の語り部 佐藤さん 太田小(南相馬)で教訓伝える

「判断と行動 大事」

東日本大震災の津波で児童七十四人、教職員十人が犠牲となった宮城県石巻市の大川小の語り部として活動している同市の佐藤敏郎さん(五八)は三日、南相馬市の太田小(高田昌幸校長)を訪れた。五、六年生計九人に対し、津波で当時大川小六年だった次女を亡くした経験を語り、命を守る行動をすることの大切さを伝えた。

二〇二一(平成二十)年三月十一日、大川小の校舎は大津波に襲われ、がれきに埋もれた。佐藤さんは中学教諭をしていた。三日後に同校に行くと、泥にまみれたランドセルと、子どもたちが並んでいた。その一人が次

女だった。何度名前を呼んでも、返事はなかった。震災から十年が経過したことについて、「現実は何年たっても受け止めきれない」と癒えぬ心中を明かす。「よく震災後という言葉が耳にするが、災害は今

後も起きうる。その意味では震災前だし、震

災と震災の間と表現するのが適切だろう」とも語った。佐藤さんは今年七月に震災遺構として公開



真剣なまなざしで佐藤さんの話を聞く児童ら



震災当時の経験を語る佐藤さん

された大川小の校舎を写真や映像で紹介。「随分寂しい場所ですねと言われることがある。けれど、ここには街、生活、命があった。実際に来る機会があれば、そんなことを思い浮かべながら見てほしい」と話した。大規模災害はいつ起きるか分からない。佐藤さんは「いくら高い

山があっても命を救ってほしくない。そこに避難するという『判断』と『行動』が何よりも大事だ」と強調。その上で「いざという時に『念のために避難する』という行動を取れるかが鍵。常に気を張るということではなく、そのためのギアを準備しておく必要がある」と呼び掛けた。